

第49回 日本^の書展 審査所感と展覧会のご案内

【漢字作品】星 弘道 (ほし こうどう)

日展理事 読売書法会常任総務 全国書美術振興会常務理事 「日本の書展」現代書壇巨匠

臨書展の審査をさせていただきましたが、壁面の関係上、入選が約半数ということでもあります。

団体、個人での出品がありましたが、団体や学校によりかなり差があるように思いました。小さな法帖からの臨書ですから、色々感じ方の違いがあると思いますが、大半がどこかの団体の作とわかり、これは指導者の考え方が反映していることと思います。

臨書は勉強の初めであり、終わりでもあるように思います。初心の人が学ぶことから書を長く続けている人も一生かけての勉強かと思えます。基礎がなんでも大切なように、常にその時点時点で合わせた臨書の仕方があるように思います。

今回、皆さんの作品を見ると、自分本意に自由な表現もあれば、指導者の意が加わった作も多く見えました。やはり、指導者のアドバイスがあった作の方が勝っていた感がありました。習い事全てそうですが、基本的な筆使い等をしっかり学ばれた方が良いと思います。

臨書はよく形臨、意臨、背臨と言いますが、この「日本の書展」公募臨書に出されているものは、私の考えであります。形を整えるには原帖と同じような線がいかに出せるようになるかが大切であり、故に、形臨、線臨を一生懸命やることが肝心かと思えます。意臨とか背臨はもう少し後になってからやられても良いように思います。

是非しっかりとした線を学ばれて、来年はより充実した作品をお待ちしております。ご精進ください。

【かな作品】高木厚人 (たかぎ あつひと)

日展特別会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表

書は日本の伝統文化の中心を成すものとして、遡れば奈良、平安時代から時に形を変え担い手を変えながら今日まで脈々と受け継がれているものであり、今では子供から大人までの多くの人々の中に息づいている。その文化伝承の真髄は古典を学ぶ、真似るといふところにあるのだが、一年を通して数多く開かれる書展の中でも臨書部門は少なく、その意味でもこの公募臨書展が、伝統文化を高い質を保ちながら次世代に継ぐという役割を担っている意義は大きい。

さて今回展における仮名部の出品は171点、その中で84点を入選とした。入選率はおよそ50%の難関である。審査をしていて「いいなあ」「素敵だなあ」と感じる作品は対象としている古典の美しさを書き手の目を通して掬い上げている作品である。そのためにも書き手は、これから書こうとする古典を前にしたとき、その古典の魅力が何処にあるのかということを見だし、それを再現しようと試みるが必要となる。理屈っぽい言い方になってしまったが、「形を真似ながら美しさを掬い上げる」行為である。原寸臨書も拡大臨書も同じく、魅力を感じつつくり返しくり返し書き、甦ってくるリズムに乗ることが大切なのである。

審査にあたっては多くの力作が並ぶ中から線が生き、明るく、リズムに乗った作品を選ばせていただいた。この臨書の学習こそ皆さんの作品制作における最も有効な勉強法。引き続き、古典の美しさに浸りながらとことん学習に励んで欲しいと願っている。

【篆刻作品】和中簡堂 (わなか かんどう)

日展会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会監事 「日本の書展」現代書壇代表

篆刻は篆刻の必須の工程で、摹刻を習熟することによって作品の精度を高めていきます。実技を向上させるのみならず、審美眼を養う上でも重要です。大変地味で、苦勞も多いのですが、摹刻を避けては進歩がありません。

今回の応募作では、西泠八家の一人、銭松が胡震のために刻した六顆や、趙之謙の「餐経養年」などの款記、側款ともに完成度の高いものから、款記が今一つ正確さを欠くものもありました。正直、銭松の六顆、趙之謙の「餐経養年」の精緻さには驚きました。近世の名人印に留まらず、古璽・漢印などの古銅印の世界にも目を向けていただければ更に視野が広がるでしょう。幅広く学ぶことをおすすめします。